

プロローグ 二人の男

登山初心者エディ（江田靖史）。この本の著者。この男は、山のことについて無知に等しい。富士山、剣岳と標高3000m級の山ばかり目指して登山をしていた。装備は十分に揃っておらず、山の知識にしても乏しいものがあつた。

二回目の登山にもかかわらず、標高差2260mある剣岳に通じる馬場島からの早月尾根に挑んだ。計画の甘さから、日没まで下山ができずに暗闇の中を、下山することになった。考えの甘さにも程がある。

エディの登山の師匠となるジーン（三長仁）。全ての持ち物にこだわりがあり、登山の経験や知識についても申し分のない男だ。教員にも関わらずヒマラヤ登山に4回も出かけている。標高5000m級までの山の事は知り尽くしていた。

山に出かける前には、一つひとつの道具を測り、グラム単位で荷物を減らすほど徹底していた。また、山の形状や天気、人の込み具合などを計算して登山計画を立てる男だった。完璧主義にも程がある。

似ても似つかないこの二人は、思いもよらない登山を始めることになる。

この話は、頂を夢に変えて山へと向かった記録であり、真実である。

第1章 出会い



日の出のところだった。あの朝、ジーンと一緒に登ることが出来ないことをどう書いたらいいのか、迷っていた。あの日の決断を、書くのは勿論のこと、どう心を整理していいのかかなり悩んだよ。ジーンがピークにアタックをかけるタイミングは、あの時が一番よかったのかどうかという問題だ。あの時は、最高に悪いことしたと思ったけど、今では、あれで最高に良かったと思っている。ほかの誰に何と言われようと、あれはあれでよかった。そう確信しているよ。

この本も、最後まで書き続けられたのは、ジーンのおかげだ。標高5000mからの登る姿を見せられたら、あきらめていいなんて思えなかった。ジーンの生き方を尊敬している。そして、そんな姿を見せてくれてありがとう。一緒に登ったことを誇りに思うよ。いつの日か、また、ヒマラヤ談義をしよう。二人で映る数少ない写真。「祝・ゴークョ・ピーク5360 登頂」最高の一枚だ。何よりも、最高に疲れているのに、それを感じさせないのがいい。楽しそうに映ってるのが、いい。かつこよくはないが、気に入っている。あれから、あの景色が臉に焼き付いて離れない。一日として、思い出さない日はない。草登山家隊。二名。ジーンとエディ。最高のパーティー（登山隊・仲間）だ。

決別の時、ジーンが残された命を全力で生きたように、自分も、自分の人生をまっすぐ

に歩んでいきたい。残された課題が山積みのように残っている。課題とは、これまで自分を支えてくれた人とのつながりを大切にすること。そして、これからの出会いを大切にすることだ。そして、東日本大震災の復興をできるだけ応援していくことだ。あの自然に生まれ、多くの人や仲間を支えられてきた。その故郷のみんなが、どんな境遇にいても、夢や希望をもって歩めるように、私は、前進していきたいと思う。震災は、家族や建物以外にも、残された人の心から、大事な何かをさらっていった。取り返しのきかないことがあるのも知っている。そんな中だ

